

大学図書館問題研究会 京都

〒607 京都市山科区大宅山田町34 京都橋女子大学図書館 小林倫道気付
 (Tell) 075-574-4118 (Fax) 075-574-4124

《Chemical Abstracts 解説講座(1)》

「書誌事項の読み方と Chemical Abstracts
 Service Source Index」

滋賀医科大学附属図書館運用係 菅 修一

はじめに

カウンターにChemical Abstracts (以後CAと略す)を携えて利用者が質問にきた時、あらかじめ知っておくとよい事項について解説したいと思います。

CAの本誌・索引及び補助資料の紹介が主になります。

CAに関する参考書にはいろいろありますが、この解説の中では、「ケミカル・アブストラクツの使い方」(1987年 化学情報協会)のみとします。適宜、参照ページを掲げたいと思います。

1. 書誌事項

カウンターに学生さんがCAを抱えてやってきて、「この雑誌は、どこにありますか」と質問してくることがよくあります。例えば、(図1一次頁)のようなところを指差して尋ねてくるわけです。

目次	Chemical Abstracts 解説講座(1) (菅 修一) 1頁
	盛況だったJLA研究集会(竹本文夫) 3頁

抄録の記載事項は、抄録番号・標題・著者名・著者の所属機関・掲載誌(書)名・出版年・巻号頁・使用言語そして抄録と、これが標準的なパターンです。

**115: 7920b Kinetics and mechanism of liquid-phase hydro-
genation of phenol. Kotova, V. G.; Murzin, D. Yu.; Zyskin, A. G.;
Kul'kova, N. V. (Nauchno-Issled. Fiz.-Khim. Inst. im. Karpova,
Moscow, USSR). *Kinet. Catal.* 1991, 32(2), 360-6 (Russ).
The title reaction on Pt/C at 80-160°/0.5-4 MPa gave cyclohexanone
and cyclohexanol. A mechanism involving 2 paths was proposed, and
the dependence of the selectivity on H₂ partial pressure was
discussed.**

(図1)

問題は、掲載誌(書)名です。斜字体で表記されているところが掲載誌(書)名なのですが、略語で記載されています。さて、学術雑誌総合目録等で所在を調べようとしても、掲載誌(書)名のフルネームが判らないと目録をひきかねる場合があります。(もともと N A C S I S - C A T なら前方一致検索を利用すればよいのですが)。

[参考] 「ケミカル・アブストラクツの使い方」(化学情報協会)の参照ページ:

312頁-321頁に「CA抄録書誌事項(CA Abstract Heading)の解説」というのがあります。雑誌論文の他に特許や学位論文といった文献の種類ごとに書誌事項の読み方を説明しています。

2. Chemical Abstracts

Service Source Index (以下、CASSIと略す)

掲載(書)名のフルネームを調べるには、CASSIを使います。

CASSIには、CAの収録対象情報源のリストとしての役割があります。CA発行以来の収録対象源の書誌情報が網らされているのです。

配列は、誌(書)名の略名の字順(letter by letter)です。

(図1)の掲載誌名のところを見ましょう(図2-次頁)。掲載誌名のフルネームがわかります。(図2)の雑誌はロシア語の雑誌です。ロシア語の雑誌には、対応する英訳版の雑誌が発行されている場合があります。(図2)の場合も「For Engl transl see *Kinet. Catal.* (Engl Trans.)」と英訳版があることが判ります。ロシア語の本誌は所蔵してなくても、英訳版なら所蔵する場合がしばしばあります。そういう意味でもCASSIは所蔵調査の際、必ず目をとおすべき資料と考えます。

告を盛り込むことになった。即ち

- 1) 日米図書館会議「職員養成」
- 2) 慶応職員研修
- 3) 公立大学図書館の現状と課題
- 4) 大学図書館実態調査

の4本。そして規模は90名程度が精一杯だろうという予想だった。ところがふたを開けてみるとなんと140名をこえる参加申込があり担当者を驚かせたようである。

当日早稲田の学術情報センターの会議室はぎっしり詰まり、入り口で立って聞き入る人が見られたほど。

内容は『大学の図書館』5月号に詳しい記事が載る予定なのでここでは基本的に省略、ごく一部の問題点を簡単にしす。

報告は、狭い特定分野だけ詳しくなるより幅広い教養を身につけた図書館員が必要とされるとする主張と特定主題を深く身につけた図書館員でないと大学では役に立たないという主張の二つがあり、興味を引いた。

また、慶應での膨大な継続研修プログラ

ムには主題知識の習得が外されており、それは自己研修でしか仕方がないという説明だった。これと比較するなら大図研大学の先進性は明らかです。即ち、京都支部は主題知識の習得こそ大学図書館員にとって最も重要なことのひとつであると認識し、ここ数年その研修プログラムをニーズに基づきながら組織的に構築し実践してきたからである。

討論は、報告が4本と盛沢山だった為ほんのわずかしが時間が取れず、話題は殆ど図書館及び図書館員の大学における地位の低さであったが、それを打開する展望はほとんど語られなかった。

いずれにしてもJLAが大学図書館員の問題で研究集会をはじめ開催したこと、しかもそれが主催者の予想を大きく上回る参加だったことは注目に値する。それは大学図書館が変化激動のさなかにあり、矛盾に満ちていること、JLAがもっと大学図書館問題に取り組む必要性を示すものと思われる。

この研究集会に出席してみて大図研の存在意義の大きさに改めて気づかされた。「大学図書館問題ではやはり大図研だ」と。

※↑● 大図研伝言板 ※↑●※↑●※↑●※↑●※↑●※↑●※↑●※↑●※↑●※↑●

↑ ● 『農林中央金庫史』1～4巻と別巻 (昭和31年12月) ※

↑ ● あげます ●

↑ ● (図書) ●

↑ ● ※その後第5巻、6巻、6巻抄が発行されているが含まず ●